# 中国古典と松陰

松　野　敏　之

## 一

吉田松陰（1830～1859）の有名な言葉に「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」〈至誠而不動者未之有也〉というものがあります。もともとは中国古典の『孟子』に見える言葉で、「まごころを尽くして事にあたれば、動かされない人はいない」というように解釈され、松陰の信念を表す言葉としても知られています。安政6年（1859）5月、萩から江戸に護送される直前に小田村伊之助（1829～1912）に宛てた文章が今も残っていますが、そこには「至誠而不動者未之有也」を大きく書した後、次のように記しました。

> 吾 学問すること廿年、齢も亦た而立〔三十歳〕なり。然れども未だ斯の語を解する能はず。今 茲に関左の行、願はくは身を以て之を験さん。死生大事の若きは姑く置かん[1]。

松陰は「至誠」のことを「身を以て之を験さん」と言いながら、江戸に護送されていきました。また処刑された同年10月27日の直前となる10月25・26日の2日間で書き上げた『留魂録』の第1条にも次のように見えます。

> 然るに五月十一日関東の行を聞きしよりは、又一の「誠」字に工夫〔修養〕を付けたり。時に子遠〔入江杉蔵〕「死」字を贈る。余 是を用ひず、一白綿布を求めて、孟子の「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」の一句を書し、手巾へ縫ひ付け携へて江戸に来り、是れを評定所に留め置きしも吾が志を表するなり。

「一の誠字に工夫を付けたり」というのは、「誠」の修養に努めたという意味になります。江戸に護送されることが決まって以来、松陰は自分の意識を「誠」にすることに努め、「死」について考えるよりも孟子の「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」の句や「誠」について考えることを重視したと述べます。松陰は30年の生涯のうち、2度投獄され計33ヶ月を獄中にて過ごしています。25歳で最初に投獄された時には獄中で『孟子』を読み、同じ囚人たちに『孟子』

の講義をしていました。松陰が死の直前まで重視した「至誠」「誠」とはどういうものだったでしょうか。「至誠」「誠」あるいは「誠意」を合わせて、“人のまごころ”や“まごころを尽くすこと”と理解されるものですが、松陰も同じ理解だったと考えて良いでしょうか。今回は、中国古典と松陰、特に松陰が死の直前まで重視した誠（至誠・誠意）について、松陰の『孟子』解釈の書『講孟劄記』から考えてみたいと思います。

## 二

松陰は、嘉永7年(1854)25歳の時、下田から米国へ密航を図り、拘禁されました。江戸に送られ、その後、長州萩の野山獄に投ぜられますが、その折に同じく野山獄に捕らえられていた囚人たちと共に『孟子』を読みました。この時に講義した内容を松陰自身がまとめたのが『講孟劄記』です。安政2年（1855）6月13日～翌3年6月13日までの1年間で『孟子』全編を読解した記録となります。

獄中にて『孟子』を読むとはどういうことでしょうか、『講孟劄記』に言及があります。安政2年（1855）7月19日の講義では『孟子』梁恵王下篇16章に見える「吾の魯侯に遇はざるは天なり」の一句を取りあげ、次のように記しています。

> 此の一語、是れ孟子自ら決心して天に誓ふ所なり。故に時に遇ふも遇はぬも、皆天に任せて顧みず。我に在りては道を明らかにし義を正しうし、言ふべきを言ひ為すべきを為すのみ。是を以て孔孟〔孔子・孟子〕終身世に遇はずして道路に老死すれども、是が為に少しも愧づることなく倦むことなし。今、吾が輩の幽囚に陥りて『孟子』を読む、宜しく深く此の義を知るべし。（『講孟劄記』巻1）

儒教の祖となる孔子も、孔子を敬慕する孟子も生涯不遇のままに終わりましたが、それでも道理や義理の探求をやめることはありませんでした。松陰もまたこのまま獄中で生涯を終えようとも、『孟子』を読み、孔子・孟子が探求した道義を深く求めるべきである、という決意を述べています。結果的にこの時は釈放されることとなりますが、松陰が獄中で読みたいと思った書は他でもない中国古典の『孟子』でした。

『孟子』という書は、中国の戦国時代の思想家である孟軻（前370頃～前290頃）の言行を記録した書です。唐代以前の『孟子』に対する評価は低いものでしたが、宋代以降になると高く評価する人々が現れるようになります。さらに南宋の朱熹が『論語』や『孟子』を『四書』としてまとめると、五経と並ぶ経書として扱われるようになり、孟子自身も孔子に次ぐ聖人として「亜聖」と呼ばれることとなりました。『孟子』の書で知られるのは、「仁義」や「性善」説ですが、他

にも興味深い論があります。一例として有名な議論に、「孟子曰く、民を貴しと為し、社稷〔国家〕之に次ぎ、君を軽しと為す。是の故に丘民〔民衆〕に得られて天子と為り、天子に得られて諸侯となり、諸侯に得られて大夫と為る」(『孟子』尽心下篇)と述べて、民が最も重い存在であり、天子も民に認められて天子となるということを論じます。この発想がさらに展開されると、革命を肯定することにも通じます[2]。

また、孟子は聖人の堯や舜を尊びましたが、それだけではなく聖人である堯・舜を目指すべき目標とも述べます。

> 曹交問ひて曰く、"人皆以て堯舜と為る可し、諸有りや"と。孟子曰く、"然り"と。(『孟子』告子下篇)

> 舜も人なり、我も亦人なり。舜は法を天下に為し、後世に伝ふべきも、我は由ほ未だ郷人たるを免れず。是れ則ち憂ふべきなり。之を憂ふること如何せん。舜のごとくならんのみ。(『孟子』離婁下篇)

これらは、"人は聖人である堯舜となるよう努めるべきである"、"聖人である舜も私も同じ人であり、私も舜のようになろうと努めなければならない"と述べています。孟子にとって堯舜は崇拝すべき対象というだけではなく、自分たち凡人が目標とすべき人物としても見ているのでした。具体的に努めるべきこととして最も重要なのは心の用い方となります。『孟子』の中にも心の問題が多くとりあげられていますが、松陰も"二つの目と一つの口があることは、堯も舜も常人と同じである"とした上で、「其の異なる者は心なり。心存すれば則ち堯舜なり。心失すれば則ち常人なり」(『講孟劄記』巻3上)と述べて、心の用い方で人は堯舜にもなるし、単なる常人のままでもあると強調しています。では、聖人の心の用い方と「誠」は、どのように関連してくるでしょうか。『孟子』の中で、特に言及の多い聖人である舜を取りあげたいと思います。

## 三

舜は、中国の伝説上の聖天子として後世の人々に尊ばれています。堯舜禹の三人が統治していた時代は、後世の人々からは泰平の時代として仰がれます。しかも彼らは天子の位を自分の子孫に伝えるのではなく、最も有能な人物に譲るという「禅譲」を行ないました。舜で言いますと、舜は当時の天子である堯の二人の娘を娶り、臣下でありながら天子の位を譲られます。舜が天子の位にあること39年、天下は安らかに治まり、次の天子の位は洪水対策で功績のあった臣下の禹に譲りました。また、舜は親孝行者としても知られています。若い頃、父母と

弟に憎まれ、ついには家族から命を狙われるということがあったと言われます。しかし、舜は懇切に父母に孝養を尽くし、弟との関係も良い方向に改善していきました。『孟子』離婁上篇28章では、子である舜を殺そうとするくらい頑迷な父の瞽瞍が、舜の孝心によって変わったことを称賛しています。松陰はこの章で、舜の孝心に注目し、次のように論じました。

> 此の章、「天下の父子たる者定まる」と云ふこと、深味あり。瞽瞍〔舜の父〕は天下の頑父なれども、大舜の至孝あれば「豫びを底す」に至る。然れば天下豈復た事ふべからざるの父あらんや。是、天下の父子たる者定まるなり。……凡そ慈父・仁君に事へて孝子となり忠臣となる者、古今少からず。誠に吉祥善事と云ふべし。暴君・頑父に事へて忠孝なる者に至りては、不孝の至り、誠に哀しむべし。然れども是に非ざれば真の忠孝の誠意を観るに足らず。余、因つて忠孝の最も不孝なる者を集輯して一書となし、以て慈父・仁君に事へて不孝不忠なる者を諷せんと欲す。而して未だ及ぶに暇あらざるなり。(『講孟劄記』巻3上)

世の中に、慈愛に満ちた父や仁徳ある君主にお仕えして、孝子・忠臣となった者は多いのですが、なかには暴君や頑父につかえて、忠孝の誠意を示した人もいたと言います。もちろんその筆頭は、頑父をもった舜です。舜は「孝の誠意」によって、自分を殺そうとすらした父の心を変えているからで、それ故に舜の親を思う心は「至孝」と表現されるのです。舜は、松陰が生涯の問題として抱き続けた「誠」を体現した人物でした。

## 四

孟子は舜を聖人として敬っていますが、一方で「舜のごとくならんのみ」(『孟子』離婁下篇)と言って目指すべき人物としても位置づけています。松陰は『孟子』解釈を通して、舜のようになるためには、何にどのように努めていくべきであると考えていたでしょうか。『孟子』告子下篇2章に「人皆以て堯舜と為る可し」と見えますが、そこでは次のように解釈しています。

> 王陽明の説に、「聖とは私欲消尽して天理純然なるの名なり。量目の軽重に非ず。故に聖は純金の如し。其の軽重に至りては、聖たる所以に非るなり。故に聖人中に在りて自ら軽重あり。堯・舜・孔子の如きは百両金なるべし。文王・周公は七八十両、湯・武は五六十両などと、各〻軽重の差はあれども、純金たることは同じ。今、吾が輩と云へども、私欲を消尽し天理純然ならば、亦自ら一両や二両の純金はあるべし。然れども後世の学者、力を此の処に用

ひず、徒に才力智勇を尚ぶは、銅鉄を混じて金の量目を重くせんとするが如し。故に愈〻学んで愈〻聖を去ること遠し」と云へり。［此の説、『伝習録』に見ゆ、今臆記する所に因りて大意を記すのみ[3]］此の説、明白と云ふべし。然れども学者多く銅鉄を混じ、量目を重くするの念已み難し。浩嘆に餘りあり。余因つて自ら期する所あり。凡そ人の人たる所は、私心を除去するにあり。是、聖学〔儒教〕の工夫〔修養〕なり。（『講孟劄記』巻4上）

王守仁（陽明、1472～1529）の説を引用しながら、聖学に努めるとは私心・私欲を除去することだと言います。王守仁の譬えによれば、私心・私欲を除去することは自分のなかにある純金を養うこと、「才力智勇」を磨くことは銅鉄を養うことであって、優先すべきは私心・私欲の除去となり、それが儒教の修養だと言います。王陽明はこれと関連して別のところでは、「誠意は是れ私意ならず。誠意は只だ是れ天理に循ふのみ。」（『伝習録』巻上）と述べて、「誠意」〔意を誠にすること〕がこの私欲を除去するという修養であるとも述べています。

そもそも松陰は、「誠」に努めることを重視し、生涯の指針としていますが、『講孟劄記』でも、学問の要点の一つを「誠」に見いだしています。

四書、六経、歴代史乗〔歴代の歴史書〕、浩瀚なりと云へども、其の日用〔日常〕の要帰は一の「誠」の字に止る。而して君としては仁、臣としては忠、父としては慈、子としては孝、是のみ。然れども仁忠慈孝、亦許多の節目あり、許多の方法あり、博学詳説するに非ずんば、安んぞ万変に酬酢し精微を分析することを得んや。已に博、已に詳、又其の約に帰することを知らずんば、遂に渉猟と拘泥との弊を免かれざるなり。（『講孟劄記』巻3上）

中国の経書である『四書』『六経』や歴史書の内容は広範囲に及ぶものではありますが、その要点を求めれば「誠」であると言います。君としては仁、臣としては忠、父としては慈、子としては孝ということであり、この仁忠慈孝の「誠」を求めることが人として努めるべき最優先のことと言うのです。松陰も先に引用しました『留魂録』第1条で「一の誠字に工夫〔修養〕を付けたり」と述べている通り、「誠」を修養（工夫）ととらえています。つまり、聖賢の学において最も重要なのは誠（至誠・誠意）の修養に努めることであり、その誠の修養とはまず私心・私欲を除去していくこととなります。しかし、心を「誠」にする、私欲・私心を除去するということは、簡単なことではありません。

「私心・私欲」とは自分のことだけを考えるような心のことではありますが、中国古典をふまえた松陰のいう「私心・私欲」とは、人らしい有り様を阻害する心、あるいは社会や人間関係を崩すような人の心と言っても良いかもしれません。

儒教は本来、「飲食男女の欲」と表現されるような欲を否定することはありません。言い換えれば、人が人として生きていく、あるいは人が社会で生きていくのに必要な欲は認めています。いわゆる宗教が「無欲」（欲望の完全なる除去）を目指すとしたら、儒教は「寡欲」（欲を寡なくする）に努めます。そのため、私心・私欲とは、人が成長しようとする意思や社会の発展において必要な欲望を指すものではありません。松陰たちの言う私心・私欲は、あくまで自分や社会にとって妨げとなるもののこととなります。たとえば、本来何々をしなければならないと分かっているのに、気乗りがしなくて取りかかれないとか、逆にそうしてはならないと分かっているのに、「少しだけだったら」とか「誰も見ていないから」と自分で自分に言い訳をしながらやってしまう。あるいはAとBの選択肢があった時、本来ならAを選択すべきなのに、Aを行うのは面倒だと感じ、自分の中でもっともらしい理屈を探してBを選択してしまうなど、人は自覚・無自覚を問わずに自分をごまかしたり、詐ったりすることがあります。そういう心が私心・私欲と言えるでしょう。人はたやすく安易なところに流れ、その上もっともらしい理由をつけて、これで良いのだと自分すらごまかしていく、そういう心をあばき、本来すべきことをするようにさせるのが私心・私欲の除去、すなわち「誠」の修養となります。

では、「誠」を体現した聖人である舜の心の用い方について、松陰はどのように解釈しているでしょうか。

## 五

舜は生涯変わることなく父母に仕えたことによって、『孟子』では「大孝」と称賛されています（『孟子』万章上篇2章）。しかし、当初は舜の父母と弟が舜のことを憎悪し、殺害まで企てていたことが、『孟子』や司馬遷（前145/135頃～前87/86頃）の『史記』に記されています。『孟子』万章上篇2章に見える話を簡単にまとめると次のようになります。

舜はすでに才能を認められ、堯から2人の娘を妻にもらっていましたが、まだ天子にはなっていない時期についての質問です。

万章〔孟子の弟子〕「舜の父母は、舜に倉庫を修繕させている間に倉庫を焼き〔失敗しましたが〕、次に井戸をさらわせ、その最中に井戸を土で埋めてしまいました。象〔舜の弟〕は、兄の舜が死んだと思い込み、兄の物を自分の物にしようと舜の家に乗り込みました。ところが、兄は生きていて、琴を奏でています。そこで象は“嬉しい限りです、井戸の事故以来、ずっと兄上のことを思っておりました”と述べ、舜は“これからは多くの役人たちを、お前も私と一緒に統治しておくれ”と言ったといいます。いったい舜は象が自分を殺そうとしていたことを知らなかったのでしょうか。」

孟子「どうして知らないことがあったろうか。ただ舜は“象が憂えれば舜も憂え、象が喜べば舜も喜ぶ〈象憂亦憂、象喜亦喜〉”というだけだ。」と。

この第2章の話はまだ続きがありますが、孟子が答えた「象憂へば亦憂へ、象喜べば亦喜ぶ」〈象憂亦憂、象喜亦喜〉は、古来よりすっきりとした解釈がないところでもあります。そもそも万章にしても、自分を殺そうとした弟に対し、舜がなぜ「自分と一緒に統治して欲しい」と言ったのかが分からず、孟子に質問しているわけですが、「弟が憂えれば自分も憂え、弟が喜べば自分も喜ぶ」とは舜のどのような心境を言うものなのでしょうか。近世の東アジアに大きな影響を与えた、朱子学の祖である朱熹（1130～1200）は、次のように解釈しています。

> 象 素より舜を憎み、其の宮に至らず、故に舜 其の来るを見て喜び、之をして其の臣庶〔臣民〕を治めしむるなり。孟子言ふ、舜は其の将に己を殺さんとするを知らざるに非ず、但だ其の憂ふるを見れば則ち憂へ、其の喜ぶを見れば則ち喜ぶ、兄弟の情自ら已む能はざる所有るのみ。（『孟子集注』巻9）

朱熹は「兄弟の情」に注目し、普段は自分のところにやって来ることのない弟が、珍しく来たことを喜び、舜は弟が自分を殺そうとしていたことを知ってはいたが、弟の憂いを自分の憂いとし、弟の喜びを自分の喜びにするという、兄弟として何物にも替え難い心情があることを指摘します。朱熹の解釈は、近世以降の中国はもとより、日本・韓国など東アジアでも基本的な解釈となります[4]。もちろん松陰もこの朱熹の解釈を知ってはいますが、さらに松陰なりの見解を加えていきます[5]。

> 程子、「象憂ふれば亦憂へ、象喜べば亦喜ぶ。人情天理、是に於て至れりと為す。」と。此の説甚だ妙〔素晴らしい〕。試みに思ふに、舜の心、象の憂喜するの事を同じく憂喜するに非ず、象の憂喜するを憂喜するなり、譬へば慈親の愛児を視るが如し。児まさに喜笑歓娯すれば、親の心甚だ喜ぶ。児方に憂患涕泣すれば、親の心甚だ憂ふ。是、親の憂喜、人情に発し天理に原づき、少しの詐偽あるに非ず。若し其の憂喜する所の事を同じく憂喜すると云はば、大人小人憂喜する所各々異なり。而して強ひて是れを同じくせんとせば偽のみ。（『講孟劄記』巻3下）

松陰が注目するのは、「詐偽」のない心情とは何かということです。家族あるいは人を思う心で最も大切なのは、その人が憂えていたり、喜んでいたりする事を共有し、一緒になって憂えたり喜んだりすることではないと言います。たとえば、家族や人から何々が面白いと勧められ、自分も試してみて一緒になって楽し

んだり、あるいは落ち込んでいる家族からその理由を聞き、一緒になって悲しんだり、または憤慨したりすることとでも言えましょうか。しかし松陰は舜の心の用い方は、そのような憂いや喜びの対象を共有することではないと言います。そこにはまだ相手に合わせて喜んだり悲しんだりするふりをするという「詐偽」が入り込む余地があることになるのでしょう。相手の憂い喜びの対象に合わせて自分も憂え喜ぶことは、場合によっては無理矢理相手に合わせるようなことも出てきてしまい、それは「詐偽」の心となってしまいます。松陰は舜の弟に対する心とは、ただ相手が喜んでいれば、それだけでこちらも嬉しくなり、相手が悲しんでいれば、それだけで自分も悲しくなる、そういうものだと指摘します。これを赤子に対する親の心境で喩えます。赤子が笑っているだけで、自然と親も嬉しくなり、また赤子が泣いているだけで悲しくなる、そういう心情こそが詐偽のない心と指摘するのです。

## 六

『講孟劄記』から「誠」に関連する議論を概観しました。松陰は中国古典での議論をふまえながら誠（至誠・誠意）を修養ととらえ、私心・私欲を除去することを重視しました。舜は誠を体現した代表的な人となります。舜の心の用い方については、今回とりあげた「象憂へば亦憂へ、象喜べば亦喜ぶ」以外にも、舜の「怨怒（えんど）」という話題もあります。舜もまた常人と同じように怨んだり怒ったりことはあるけれども、ただその場合は相手にただちに忠告直言して、その怨みや怒りを胸中に留めるようなことはしないと言います。君子の心は天のようであり、時に雷霆（らいてい）の怒りを発することはあってもその事が解消すればまた晴天となります（『講孟劄記』巻３下・万章上篇３章）。ここにも私心・私欲を差し挟まない心というものが述べられております。

本学の教育理念――“「誠意・勤労・見識・気魄」を兼ね備える教育を行う”の筆頭に挙げられるのは「誠意」ですが、“誠意とは、真心と慈悲の心で、世のため、人のために尽くすこと”とあります。松陰の解釈をふまえれば、この「誠意」に私心・私欲を介在させないよう努めることが重要であり、かつ難しい問題となるのでしょう。“世のため、人のため”と言うのは容易ですが、本当にそれは“世のため、人のため”の行動なのか、本当は易きに流されているだけではないのか、あるいは自分に都合が良いことを自分すら騙して行なおうとしているだけではないのか、絶えず自分の心をチェックすることが求められることになります。松陰が生涯をかけて取り組もうとした「誠」（至誠・誠意）は、「まごころを尽くす」という表現では言い尽くせない、厳しく自分の心を見つめる修養と言えましょう。

**注釈**

(1) 本稿で引用した『講孟劄記』『留魂録』は『吉田松陰全集』(山口県教育会編纂、岩波書店、1938～40年）に基づいていますが、読みやすいように適宜ルビを付し、〔　〕によって筆者の補注を加えています。本稿の引用文に見える〔　〕は全て筆者の補注となります。また、解釈においては近藤啓吾全訳注『講孟劄記』上下（講談社、1979～80年）を参考にしています。

(2) 革命を肯定する孟子の論は日本でも警戒され、『孟子』を積んだ遣唐使船は日本に辿り着く前に沈没するというような話も見られます。上田秋成『雨月物語』巻1・白峰には、「漢土(もろこし)の書は経典・史策・詩文にいたるまで渡さざるはなきに、かの孟子の書ばかり未(いま)だ日本に来(きた)らず。此(この)書を積みて来る船は、必しもあらき風にあひて沈むよしをいへり」とあります。

(3) 松陰も「臆記する所」と述べている通り、『伝習録』巻1には「堯舜は猶(な)ほ万鎰(いつ)のごとし、文王・孔子は猶ほ九千鎰のごとし、禹・湯・武王は猶ほ七八千鎰のごとし、伯夷・伊尹は猶ほ四五千鎰のごとし」とあります。

(4)『孟子』の解釈において、後漢・趙岐(ちょうき)『孟子注』、北宋・孫奭(そんせき)『孟子正義』から日本江戸時代の伊藤仁斎『孟子古義』など、多くの『孟子』の注釈書が朱熹のように“弟の憂喜にしたがう”と解釈しています。やや異なる解釈としては、南宋・張栻(ちょうしょく)『癸巳孟子説』や日本江戸時代の中井履軒(りけん)『孟子逢源』に、“象と舜が何を憂え、何を喜んだのか”という憂喜の対象を明示したものもあります。いずれにしても松陰のように心情そのものに注目した解釈は、異例のものとなります。

(5)『孟子』全体に亘って松陰の独創的な解釈は多々見えます。舜の議論だけに限っても、『孟子』万章上篇2章でなぜ弟を詰問しなかったかという理由の考察(『講孟劄記』巻3下)や、舜が堯の娘を娶る際に、親に告げずに結婚したと言われていることを否定している（『講孟劄記』巻3下）など、中国や日本の歴代『孟子』解釈にはない見解が見られます。